

物語的文章の構成分析

— 中心事件とその前後の変化に着目して —

野浪正隆

0. はじめに

かつて「物語文の構成分析試案」(1995 「学大国文」 38)

<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~kokugo/nonami/ronbun/monogatari.html>

の中で次のように書いた。

小説・物語文は、「状況・心理・行動」の変化の系列としてとらえることができる。先行文脈によって形成されている「状況・心理・行動」のうちのある要素(複数の場合もある)が、変化することによって、他の要素が変化する。例えば次のように。

状況変化→心理変化 雨がやむ→心が晴れ晴れする

状況変化→行動変化 大きな音がする→とっさに耳を塞ぐ

(通常は心理変化を介して行動変化をおこすので、典型としては心理変化を介さない反射的な行動変化を挙げた)

本稿は、「変化」とその契機である「事件」によって、小学校国語教科書教材を構成分析し、「深い読み」への着眼点を提出しようとするものである。

物語的文章は事件の連鎖ででき上っているので、単純化することが難しいが、複数の事件の中で最も重要な事件「中心事件」だけを取り上げる。しかし、どの事件が中心事件であるかは一つに決まらない場合がある。中心事件がどれなのかを吟味していくところに「深い読み」が生じる可能性がある。

小学校専門科目国語 I ・国語学講義 I で、

- 何が変わったのか、その契機は何かに着目して、
- 物語的文章を「事件前・事件・事件後」に分けて、
- パワーポイントファイルか PDF ファイルを作るという宿題を出しておいて、
- 授業時間中に相互評価、
- その後野浪が解説

という授業をしてきた。多くの受講生が示したのは、彼ら既存の物語スキーマによる構成分析であり、「中心事件と変化」が捉えられない小学生が示す構成意識と変わらないものだった。物語スキーマが成長していないということを示すのだろう。

将来教員になる学生が学習者と同レベルの物語スキーマしか持っていないとしたら、彼らが教員になった時、物語的文章を扱う授業をどのように構想するのだろう。「深い読み」ができる人材、「深い読み」に学習者を導ける人材を養成するためには、「中心事件とそ

の前後の変化」に着目することが有効であると考えている。

1. 分析対象

以下の31作品を分析対象とする。(紙面の都合で、出典は示さない。)

- 1年生教材 おおきなかぶ おむすびころりん くじらぐも たぬきの糸車
たぬきのじてんしゃ
- 2年生教材 お手紙 スイミー きつねのおきやくさま アレクサンダとぜんまいねずみ
かさこじぞう スーホの白い馬
- 3年生教材 つり橋わたれ モチモチの木 消しゴムころりん おにたのぼうし
ちいちゃんのかげおくり
- 4年生教材 白いぼうし ごんぎつね 三つのお願い 一つの花 世界一美しいぼくの村
- 5年生教材 チョコレートのおみやげ 注文の多い料理店 手紙 大造じいさんとガン
ちかい
- 6年生教材 ロシアパン 山へ行く牛 川とノリオ オじいさんのチェロ 海のいのち

2. 小学校国語教科書教材の構成分析

2.1 1年生教材

2.1.1 「おおきなかぶ」 物語の大部分を占める中心的事件

視点は客観視点。主人公は全員。

事件前 おじいさんが、かぶのたねをまきました。「あまいあまいかぶになれ。大きな大きなかぶになれ。」あまいあまい、大きな大きなかぶになりました

事件 おじいさん おばあさん まご いぬ ねこ ねずみ みんなで引っ張って

事件後 とうとう、かぶはぬけました。

おおきなかぶが抜けたことが結果の変化で、事件はみんなで引っばったこと。というのがオーソドックスな読みだろう。

みんなでひっぱった事件に着目して、「おじいさん おばあさん まご いぬ ねこ ねずみ」と次第に増えていくところが重要であると考えて、「試行錯誤の重要性」や「援助を求めることの必要性」を主題と考えることができる。

ねずみが参加してやっと抜けたので、ねずみの参加が重要で中心事件であるという考えからは、「集団の構成員外の力を取り入れることで成功する」という主題になるかもしれない。無理があるが。

1年生の教材を上級の学年の教材として読むときには、中心的事件の吟味を通じて、読みの広がりを楽しむのが良いだろう。

2.1.2 「おむすびころりん」 恩返し譚?

視点人物はおじいさん。主人公もおじいさん。

地下のねずみの住処に行くことが中心事件であるとするか、ねずみの住処に行くことが事件後の変化であるとするかで、二通りの構成分析になる。

● 地下のねずみの住処に行くことが中心事件であるとする場合

事件前 おおむすびころりんすつとんとん。なかがすいてることなんか、わすれてしまったおじいさん。うたにあわせておどりだす

事件 ねずみの住処に行つて、もてなしを受ける

事件後 おれいのこづちをてにもつて、おうちにかえつてばあさんと、おどつたおどつたすつとんとん

ねずみの住処という異世界が中心事件の場所で、変化はおみやげのこづちを手に入れて、「それからふたりはいつまでも、なかよくたのしくくらししたよ。」ということになる。物語の中の「日常世界→異世界→日常世界」と世界が移るし、お土産のこづちによって裕福に暮らすという「恩返し お土産付き」の構成でもある。

● ねずみの住処に行くことが事件後の変化であるとする場合

事件前 やまのはたけをたがやして、おなかがすいたおじいさん。そろそろおむすびたべようか。つつみをひろげたそのとたん、ころころころりんかけだした。のぞいてみたがまっくらで、みみをあてたらきこえたよ

事件 おなかがすいてることなんか、わすれてしまったおじいさん。うたにあわせておどりだす。とうとうあしをすべらせて、じぶんもあなへすつとんとん、ねずみのおうちにとびこんだ

事件後 ねずみの世界に行つてもてなしを受ける。おれいのこづちをてにもつて、おうちにかえつてばあさんと、おどつたおどつたすつとんとん

おじいさんは「おむすびころりんすつとんとん。」という歌が聴きたくておにぎりを穴に落とすただけであつて、意識的に恩を与えたわけではないので、「恩返し お土産付き」の構成というより、ノリのいいおじいさんの異世界への小冒険譚という構成になる。

変化は日常世界から異世界への移動。

授業では、中心事件に関わる「おむすびころりんすつとんとん」のねずみの踊りと、おじいさんの踊りを考え、話しあつて、披露することになるだろう。

2.1.3 「くじらぐも」 現実世界へ 簡単に帰ってくる

視点は客観視点。主人公は2年生の子どもたちと先生。くじらぐもは変化しない・

「おむすびころりん」と同じく、「現実世界→異世界→現実世界」という構成と、中心事件が異世界に移動する契機であるとする「現実世界→中心事件→異世界」という構成とが考えられる。

● 「現実世界→異世界→現実世界」という構成

事件前 日常世界から

事件 異世界へ くじらぐもの上から海や村や町を見る

事件後 日常世界へ帰る

● 「現実世界→中心事件→異世界」という構成

事件前 日常世界から

事件 希望を実現させようという努力

事件後 現実世界へ 簡単に帰ってくる

学校の体育という日常世界からクジラぐもの上という異世界へ移動する契機は何か、それが中心事件。「天までとどけ、一、二、三。」を行動化する活動は、中心事件における心情把握と表現活動を狙っているのである。

2.1.4 「たぬきの糸車」 恩返し譚？

視点人物はおかみさん。主人公はたぬき。変化するたぬきをおかみさんが見ている。

事件前 おかみさんがたぬきをかわいいなあと思っている

事件 おかみさんがたぬきをわなから逃がしてやる（恩を与える）

事件後 たぬきが紡績（恩返し）

恩返し構成では、恩を与えるところが中心事件。それによって、恩を受けた者に「恩返ししなくては」という意識変化が起きるのだろう。

ただし、この話のたぬきに恩返しの意識があったかどうかは不明。おかみさんのまねをして、糸繰りをしてみたかっただけかもしれない。「うれしくてたまらないというように、ぴよこぴよこおどりながらかえっていきました」が恩返しのできた喜びを表しているのか、おかみさんのように糸繰りができた喜びを表しているのかは、わからない。

2.1.5 「たぬきのじてんしゃ」 十分な対策

視点人物はたぬきのこども。主人公もたぬきのこども。他の登場人物はカラスだけ。事件を並べてみる。

1. たぬきのこどもは、あかいじてんしゃをかってもらいました。
2. じぶんでじぶんのしっぽをひきそうになりました
3. こうしてしっぽをくわえてのれば、あんぜんだと考えた
4. たぬきは、しっぽをくわえてはりました
5. 「やあい、じぶんのしっぽをたべてるぞ。」とからすがからかいました
6. 「ちがうったら。」たぬきは、うっかりしゃべってしまいました
7. くちからはなれたしっぽは、しゃりんにぎゅっと、ひかれてしまいました
8. たぬきのこどもは、ひめいをあげてしまいました
9. それから、じてんしゃにのるときは、しっぽをひもでせなかにしっかりおんぶして、はしることにしました

たぬきのこどもは自転車にしっぽを2回轢かれている。対策を立てて轢かれないようにしたという話で、最終的な変化は9の「しっぽをひもでせなかにしっかりおんぶしてはしる」である。その契機になった事件はカラスのからかいによるしっぽ轢かれである。しっぽをくわえてはしるという対策は不十分だったのである。

事件前 自転車を買ってもらったたぬきのこどもは、しっぽを轢かないために、啞えて走った

事件 カラスのからかいに反論しようとして、しっぽを轢いてしまった
事件後 しっぽをひもでせなかにしっかりおんぶしてはしることにした

2.2 2年生教材

2.2.1 「かさこじぞう」 手ぬぐいの重要性

視点は客観視点（時々おじいさん視点）

大きな変化は、おじいさん夫婦の食糧事情の変化。

契機は、売れなかった笠をお地蔵さんにかぶせる。

学生は素材を「いらすとや」で探すので、おじいさんが自分の手ぬぐいを最後の地蔵様にかぶせている絵を見つけて使う。ただしその絵の意味が分かっているかは不明。

売れ残りの四枚の笠をかぶせて、自分がかぶっていた笠をかぶせて、手ぬぐいまでかぶせる。地蔵様たちが「正月支度をおじいさん夫婦に持って行ってやろう」と思うようになったのはどの時点か？もちろん、手ぬぐいの時点である。

地蔵様たちにいいことをする人は他にもいるだろう。掃除をしたり涎掛けを作ったり懸けたりすることで、大晦日の晩に庶月支度を持ってきてもらえるだろうか？ おじいさんのように自分が辛くなるのも厭わずに手ぬぐいを差し出す「自己犠牲」に地蔵様たちは心を動かしておじいさん夫婦に報いたのだろう。

事件前 貧しいおじいさん夫婦、笠を作って売りに行くが売れない。地蔵様たちに笠をかぶせるが、足りない。（地蔵様たちは、おじいさんがどうするか見ている）

事件 おじいさんは自分がかぶっていた手ぬぐいを最後の地蔵様にかける。

事件後 （地蔵様たちは心を動かして、正月支度を用意して）

地蔵様たちから届けられた正月支度で、よいお正月をむかえることができた。

()の内容はかさこじぞう本文には書いていない。書いていない地蔵様たちの心理変化を読み取ると、地蔵様たちの心理変化の契機が「自分の手ぬぐいをかぶせる」であることが明確にできる。

2.2.2 「スイミー」 復讐譚？ 回復譚？

視点人物・主人公はスイミー

1. 平和に暮らしている
2. マグロに仲間を殺される
3. 海の生物で心が回復
4. 新しい仲間と協力して
5. 大きな魚を追い出す

という事柄の連鎖で、どれを中心事件にするか。

学生は、事件前 123 中心事件 4 事件後 5 という構成だと考えた。復讐譚「やられて、苦勞して、やり返す」である。

スイミーの絵本の研究からは、事件前 12 中心事件 3 事件後 45 という回復譚「やられて 異文化によって 癒された」が示される。

2年生に「ナチスからアメリカに逃れたユダヤ人のレオ・レオニが居場所を見つけていった」という解説は不要であろう。回復譚の読みもあるということが分かれば良い。

2.2.3 「アレクサンダとぜんまいねずみ」 どちらの変化なのか

視点人物・主人公はアレクサンダ。

1. アレクサンダがゼンマイねずみを羨んだ
2. じぶんもゼンマイねずみになりたいと思っていた
3. 自分をゼンマイねずみに変えられるかまほうのとかげに尋ねた
4. ゼンマイねずみが捨てられてアレクサンダは可哀そうだと思うようになった。
5. ゼンマイねずみを本物のねずみに変えるようにまほうのとかげに頼んだ
6. ゼンマイねずみは本当のねずみになった

学生は中心的事件を「5.ゼンマイねずみを本物のねずみに変えるようにまほうのとかげに頼んだ」とし、変化を「6.ゼンマイねずみは本当のねずみになった」とした。外形の変化に着目したのである。「変身譚」ととらえている。

アレクサンダの心理の変化「ゼンマイねずみになりたい→ゼンマイねずみが可哀そうだから、ゼンマイねずみを本物のねずみに変えてやりたい」に着目して、「4.ゼンマイねずみが捨てられてアレクサンダは可哀そうだと思うようになった。」を中心事件に置くという考え方もできるようにしたい。

2.2.4 「お手紙」 どちらのへんかなのか 2年生教材としては複雑な構成

視点は客観視点。かえるくんが主人公か、がまくんが主人公か。

変化したのは何か？ かえる君のガマ君に対する友情は変化していない。ガマ君のかえる君に対する友情もそれほど変化していない。手紙がこないガマ君に手紙が来るという変化がある。友情を表明していなかったかえる君が表明したという変化がある。

学生はがまくんを変化の主体として、

事件前 お手紙を貰えなくて悲しい

事件 かえる君が手紙を書いて、かたつむり君に渡し、四日後届けて貰ったこと

事件後 手がみをもらって、がまくんはととてもよろこびました。」

とした。

かえる君の心理変化の物語とすれば

事件前 手紙が貰えなくて悲しい思いをしているがまくんを喜ばせようと思う

事件 ガマ君に手紙を書く。届かないので手紙に内容をガマ君に話す

事件後 「二人とも、とてもしあわせな気持ちで、そこにすわっていました。」

となる。

ガマ君はかえる君の友情表明「しんあいなるがまがえるくん。ぼくは、きみがぼくのしんゆうであることをうれしくおもっています。きみのしんゆう、かえる」に対して、「とてもいい手がみだ。」と反応し、手紙の実物を手にして「がまくんはととてもよろこびました。」と反応する。友情よりも手紙の方が大事というか、かえる君の友情は確定事項で動かない

と半ば無関心で、それよりも物理的な手紙に大きな関心を寄せているように書かれている点に着目すると、かえる君の友情とガン君の友情はずれているように思える。

2.2.5 「スーホの白い馬」 いろいろな事件が起こって、中心事件がわかりにくい作品。

白い馬の生死を変化とするならば

事件前 スーホと仲良く暮らす白馬

事件 王様の競馬後、逃げ出して矢を射かけられる

事件後 スーホの腕の中で息絶える+馬頭琴の話

となる。

事件前 幸福な時期

事件後 不幸な時期

と大きく分けるならば、不幸になっていく契機＝中心的事件は、「この知らせを聞くと、なかまのひつじかいたちは、スーホにすすめました。「ぜひ、白馬にのって、けい馬に出てごらん。」そこでスーホは、白馬にまたがり、広々とした草原をこえて、けい馬のひらかれる町へむかいました。」ではないか。明確には書いていないけれど スーホは白い馬を「欲を満たす手段」に使ってしまった。なかまのひつじかいたちの言葉は「悪魔の囁き」だと言える。後日譚（馬頭琴の話）の底に流れているのは後悔と謝罪である。

2.2.6 「きつねのおきゃくさま」 俺の命なんて

学生は、変化＝きつねの生死 であるとして、

事件前 ひよこ・うさぎ・あひると楽しく暮らすきつね

事件 狼が襲う

事件後 狼と戦って、きつねは傷つき、はずかしそうにわらってしんだ

としたが、

変化＝きつねの心理変化 とすると、

事件前 太らせて食べよう

事件 「きつねお兄ちゃんは神様なんだ」ということを繰り返し聞いて

事件後 自分の命を賭けて守ろう

となる。事件は長いが、徐々にきつねの心理は変化していった。きつねの死は心理変化の最終形態「はずかしそうにわらって（自分は死んでしまうけれど、ひよこ・うさぎ・あひるを守ることができてよかったなあという満足感）」と考えられる。

2.3 3年生教材

2.3.1 「つり橋わたれ」 こだまは何？

視点人物・主人公はとっこ。

とっこが、課題「村のこどもたちと仲良くなる」「つり橋を渡る」をやまびこによって解決するという成長物語。

事件前 村のこどもたちと仲良くなれない。つり橋が渡れない

事件 夢中になってやまびこを追いかける
事件後 つり橋がわたれた。村のこどもたちと仲良くなれた
という変化が書かれている。

課題が無意識のうちに解決しているところに注目したい。

2.3.2 「モチモチの木」 3年生を応援する話

視点人物・主人公は豆太。豆太の成長譚とすると、

事件前 もちもちの木を怖がる臆病まめ太

事件 おじいさんが腹痛で、医者呼びに夢中で夜道を駆ける

事件後 やっぱ臆病まめ太だけれど、やさしいということは自覚できた。いざとなった
らできる自信もついた

無我夢中で課題を解決するところは、「つり橋わたれ」と似ている。課題解決能力は自覚していないが持っていて、事件を通じてその能力を夢中のうちに発揮して、自分や自分と周りの関係を変える点である。

豆太が臆病だったり寝小便をしたりすること、事件後でも人が変わったような成長をしていないことは、この物語が3年生を応援する役割を担っているからだろう。自分と同じように情けない存在の豆太が「やるときはやって」ちいさく成長する。だから学習のはじめか終わりに「何かをきっかけに、できるようになったことを発表しあいましょう。ささいなことでも構いません」という活動を入れたい。

2.3.3 消しゴムころりん 気づいたら好きになってしまっていたんです。

視点人物・主人公はさおり。

事件前 さおりはゆきひろのことが好きだけれど、自覚していない。自分の思い通りに反応してくれないゆきひろに不満を持っている。(好きだから不満を持つのかも)

事件 ヤモリがくれた「本当のことは消えない消しゴム」を使う

事件後 さおりはゆきひろのことが好きだし、ゆきひろもさおりのことが好きだということがさおりに分かった

自分の気持ちに気づくという変化。初恋物語。

2.3.4 「おにたのぼうし」 受け入れてもらえない悲しみ

視点人物・主人公はおにた。

変化＝おにたの存在→非存在 とすると

事件前 おにたは、まこと君や女の子に親切にして、仲良くなりたかった。

事件 女の子は「お母さんのために豆をまきたいなあ」という。

事件後 おにたは豆を置いて、(人間と仲良くすることに絶望して) 消える
となる。

変化＝おにたの心理変化「人間と仲良くしたい→おにだって、いろいろあるのに(わかってもらえない)」としても、心理変化に伴って存在を消すので、事件前・事件・事件後

の内容は変わらない。そのことより、「おにたは非現実的な存在だけれど、現実世界にいる「鬼だから」で切り捨てられるのはどんな人たちでしょう。具体的に書きましょう。そして、そういう人たちとどう付き合うべきか考えましょう。」という活動が読みを広げることになると考えられる。

2.3.5 「ちいちゃんのかげおくり」 無残な戦争教材

視点人物・主人公はちいちゃん。

変化=ちいちゃんの生死 とすると次のようになる。

事件前 戦争中ではあるけれど、家族一緒に暮らしている

事件 空襲で一人ぼっちになる

事件後 栄養失調で死ぬ（夢の中でかげおくりをして家族と再会する）

大人の保護が必要な年齢のちいちゃんが、空襲によって母兄と別れてしまう。何日かは水と干飯で命を繋ぐが、結局死ぬという戦争の悲惨さを描いた作品。主人公のちいちゃんの心理変化がないので、別の構成は考えられない。

2.4 小学4年生教材

2.4.1 「ごんぎつね」 視点人物が交替する。

最終場面以外はごん視点、最終場面は兵十視点。

ごんぎつねには以下のような事件が描かれている。

1. ごんは村人にいたずらする
2. ごんは兵十のおっかあのためのウナギをだめにする
3. ごんは兵十のおっかあの葬式を見る
4. ごんは兵十を見て、「おれと同じ一人ぼつちの兵十か。」と思う
5. ごんは兵十にイワシを盗んでやる
6. 兵十はイワシ売りにとっちめられる
7. ごんは兵十に栗などをやる
8. 兵十は栗を貰って、「神さま」がくれたと思う
9. ごんは「へえ、こいつはつまらないな。」と思う
10. ごんはあくる日も栗を持って行く
11. 兵十がごんを撃つ
12. 兵十は栗がかためておいてあるのが見る
13. 「ごん、お前だつたのか。いつも栗をくれたのは。」
14. ごんは、ぐつたり目をつぶつたまま、うなづく
15. 兵十は、火縄銃をばたりと、とり落しました
16. 青い煙が、まだ筒口から細く出てみました

ごんの話なのか、兵十の話なのか。

●ごんの「改心譚」だとすると

事件前 1～3 いたずらをするごん

事件 4.ごんは兵十を見て、「おれと同じ一人ぼつちの兵十か。」と思う

事件後 兵十のために栗を持っていく

●ごんの生死の変化だとすると

事件前 1～10 いたずらをしていたが改心し兵十に栗を持っていくごん。

事件 11.兵十がごんを撃つ。

事件後 兵十が自分の行為を理解したことを知りながら死ぬごん。

●兵十の物語だとすれば、

事件前 ごんはいたずら者だと思っている兵十がごんを撃つ

事件 兵十は栗がかためておいてあるのが見えた

事件後 「ごん、お前だつたのか。いつも栗をくれたのは。」

中心事件が、ごんの気持ちと行動を兵十が理解するという変化を生む。

3つの違う中心事件があつて、それぞれの読みが生じる。小学生が「それを中心場面だと考える理由」を説明しあう授業ができるといい。

2.4.2 「一つの花」 事件があるのかな

学生は

事件前 戦時中の暮し「.....いったい大きくなって、どんな子に育つだろう。」 そんな時、お父さんはきまって、ゆみ子をめちやくちやに高い高いするのです。

事件 お父さんが出征する「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう.....。」

事件後 十年の年月がすぎました。「母さん、お肉とお魚と、どっちがいいの。」

とする。戦争が終わって、平和な日常が帰ってきたという変化である。

それならば、中心事件は明確に書かれていない「戦争が終わった」である。お父さんがゆみこにコスモスを一輪あげても、戦争が終わって平和になったりはしない。

事件前 戦時中の暮し+出征するお父さん

事件 (戦争が終わる)

事件後 戦後の平和な暮らし+成長したゆみこ+働くお母さん(+コスモスの陰で見守るお父さんの霊)

- 「まるで何かお話をしているかのように聞こえてきます。」 誰に？
- 「ゆみ子の高い声が、コスモスの中から聞こえてきました。」 誰に？
- 「スキップをしながらコスモスのトンネルをくぐって出てきました。」 誰のところへきたのか？
- 「そして、町の方へ行きました。」 誰のところから？

この「誰」が同一人物だとすると、誰か？

草葉の陰で家族を見守る戦死したお父さんの霊だと考えたい。

2.4.3 「世界一美しいぼくの村」 sudden fiction のような終わり方

学生は 変化=白い子ヤギを手に入れるとするが、

事件前 少し戦争の影はあるけれど、平和で希望にあふれた生活があった村

事件 その年の冬、村は戦争ではかいされ

事件後 今はもうありません。

分量的に少なく書かれた結果だからこそ、印象深いのである。失われた村の生活がかけがえのないものであったことが印象深く残る。

2.4.4 「白いぼうし」 変化と中心事件が読み取りにくい作品

客観視点 主人公は松井さん

事件前 日常世界

事件 ???

事件後 非日常世界

非日常世界への扉を開いた中心事件はなにか？

「松井さんは、その夏みかんに白いぼうしをかぶせると、飛ばないように、石でつばをおさえました。」であろう。

「白いぼうし」が異世界転移アイテムだったのである。松井さんは「おどろいたろうな。まほうのみかんと思うかな。なにしろ、ちょうが化けたんだから——。」と自分が魔法をかけたように思っているけれど、魔法にかけられたのは松井さんの方だったのである。

2.4.5 「三つのお願い」 母の言葉は

視点人物・主人公はゼノビア

学生は、3つのお願いを3場面に振り分けるけれど、それでは、事件も前後も当てはまらない。変化は、友達が大事だと思うようになって、「いい友だちがいなくなって、さびしいよ。もどってきてくれないかな。」と3つ目のお願いをするゼノビアの心理である。

事件前 お願い1と2で「あんたみたいな人、ここにいてほしくない。帰ってよ。」

事件 「いい友だちよ、ノービィ。この世でいちばん大切なものは友だちだもの。そう、いい友だち。」

事件後 「いい友だちがいなくなって、さびしいよ。もどってきてくれないかな。」

お母さんの助言がゼノビアの心理を変化させたのである。誰かの言葉で心理が変化し、行動が変化する構成は、「スーホの白い馬」と同じ。高校の定番教材「羅生門」も老婆の言葉で、下人は心理が変化し、行動が変化した。

2.5 5年生教材 中高の教材と同様の「心理変化による構成」の作品が増える

2.5.1 「大造じいさんとガン」 心理変化は読み取りやすい

視点人物・主人公は大造じいさん。

変化＝残雪に対する大造じいさんの見方

事件前 「いまいまして思っていました。」（邪魔者・敵）

事件 仲間を助けるために鷹と戦う残雪を見る
事件後 おうい、ガンの英ゆうよ。おまえみたいなえらぶつをおれは、ひきょうなやり方でやっつけたかあないぞ。（尊敬の対象・ライバル）

2.5.2 「注文の多い料理店」 心理変化が読み取りにくい

客観視点 主人公は二人の紳士

二人のわかい紳士の心理変化の物語。

事件前 ここの山はけしからんね。「実にぼくは、二千四百円の損害だ。」「ぼくは二千八百円の損害だ。」（自然を侮っている）

事件 山猫軒の中での体験

事件後 さっきいっぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯に入っても、もう元のとおりに治りませんでした。（自然に対する恐怖）

2.5.3 「チョコレートのおみやげ」 話中話に変化した？

学生には変化も中心事件も良くわからなかったらしく、変化＝物語中の話が変わったこととし、ゆきちゃんが「なんぼなんでも、ニワトリが風見どりになるゆうのんは、やり過ぎやと思うわ。」と感じて、話を作り直したと考えた。

事件前 みこおばさんがニワトリが風見どりになる話をする

事件 「なんぼなんでも、ニワトリが風見どりになるゆうのんは、やり過ぎやと思うわ。」と感じる

事件後 ゆきちゃんが「チョコレートが時間を溶かす」話に変える。

なぜ、みこおばさんは「鶏と風船売りの」話を作って話したのだろうという疑問があると、隠された事件が推測できるかもしれない。

みこおばさんの心理変化の物語であるとする。

事件前：（彼氏と喧嘩して、つまらないなと思っている）

事件：ゆきちゃんが「チョコレートが時間を溶かす」話に変える。

事件後：（彼氏と仲直りをする勇気が出てくる。チョコレートのおみやげを持って、彼氏に会いに行く）

野浪が、隠された部分分かるように「続き」を書いた。url を載せておく。

<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~nonami/omiyage.html>

2.5.4 「ちかい」 異文化理解教材は構成を簡単にしておくのかもしれない。

主人公ミーナの心理変化の物語。

事件前 「あたし、大きくなったらハンターになる！」 ヤミーナはハンターになったつもりで、強いゾウをしとめたり、サイを追いつめたり、ほこり高いライオンにしるび寄りしたりした。（ハンターの強さに対する憧れ）

事件 母象をハンターに殺された子象との遭遇

事件後 「あたし、ハンターにはならない。」（ハンターの残酷さに対する忌避感）

2.5.5 「手紙」 戦争教材は構成を簡単にしておくのかもしれない。

タケオの心理変化の物語。

事件前：タケオは、おじいちゃんのことが苦手だった。

事 件：手紙のことや戦争のことをおじいちゃんが話してくれた

事件後：このまま、いつまでも、おじいちゃんのそばにすわっていたいなと思った。

でも本当の事件は、戦争中のおじいさんや友達、友達の家族の無念さにある。おじいさんが泣くのもそこである。タケオとおじいさんの関係変化とだけ読んでしまうのは浅い。

2.6 6年生教材 作品が長くなって、事件の連鎖が増える。中心事件が決めにくくなる

2.6.1 「山へ行く牛」 関係が変化する・心理が変化する

事件は次のようである

1. 鼻木入れ
2. 「好きで行くのやないよってに。」
3. 母牛と子牛の別れ
4. とうげの食堂で母牛と島子の別れ
5. 牛は泣いていた。
6. 島子もまた、ぼろぼろとなみだをこぼした。
7. 牛がマァーッとかん高く鳴き立てるのが聞こえた。
8. 自分もまた牛になっていた。マァーッ。

事件前 子牛やオケちゃんを保護していると島子は思っている。

事件 オケちゃんがマァーッとかん高く鳴き立てるのが聞こえた。

変化後 島子が牛になって、マァーッとオケちゃんに向かって鳴く。（島子は、自分が子牛やオケちゃんを保護していると思っていたら、オケちゃんが自分を子牛のように保護する気持ちで鳴いたことに気が付いて、子牛のようにオケちゃんとの別れを悲しむ。自分も子牛のように悲しい存在であることに気が付く）

事件後の保護・被保護の関係が逆転したと意識するという作品である。

2.6.2 「海のいのち」 最後に成長したのは？

太一の成長物語。クエとの対峙が中心事件であることは容易にわかる。その場面だけ描写が細かく連続するので、事件の連鎖は次の通り。

1. 「ぼくは漁師になる。おとうといっしょに海に出るんだ。」
2. ある日父は、夕方になっても帰らなかった。
3. 中学校を卒業する年の夏、太一は与吉じいさにでしにしてくれるようたのみに行った。
4. 「千びきに一びきでいいんだ。千びきいるうち一びきをつれば、ずっとこの海で生きていけるよ。」
5. 「自分では気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。太一、ここはおまえの海だ。」
6. 「海に帰りましたか。与吉じいさ、心から感謝しております。おかげ様でぼくも海

で生きられます。」

7. 太一は海草のゆれる穴のおくに、青い宝石の目を見た。
8. この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。
9. 水の中で太一はふっとほほえみ、口から銀のあぶくを出した。
10. 「おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。」こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さないですんだのだ。
11. 太一は村一番の漁師であり続けた。
12. 千びきに一びきしかとらないのだから、海のいのちは全く変わらない。

一人前の漁師になって、残るはお父の敵討ち。でも大魚と対していて気持ちが変わる。海の命と一緒に穏やかに暮らしていく太一。

事件前 1-6 太一の成長 漁の技術・漁の精神「千びきに一びきでいいんだ。」

事件 7-10 クエとの対峙

事件後 11-13 技術と精神の成長だけでなく、親の仇をとることより海の命と一緒に暮らすことを尊いとする感情面の成長を遂げて、生活していく

2.6.3 「ロシアパン」 心理変化か状況の変化か

1. 外国人の家族がやってきた。
2. 「ロシアパン」を売るようになった。
3. 売れない。
4. 「そんなら、買ってこい。」
5. ロシアパンは、しだいに売れていった。
6. ロシア人たちと仲良しになった。
7. 日本が満州で戦争を始めた
8. (ロシアパンはスパイだ。)
9. ロシアパンはすっかり売れなくなった
10. ロシア人たちは、町からはなれることになった。
11. 子供のころ食べたあのロシアパンのほうが、もっとおいしかったような気がするのだ。

事件前 ロシア人家族がやってきた

事件 日本が満州で戦争を始めた(ロシアパンはスパイだ。)

事件後 ロシア人たちは、町からはなれることになった。

戦争によってデマが広がり、それまで仲良くしていた日本人が白系ロシア人家族をスパイだととらえるように変わってしまう。

戦争によって物理的な被害を受けなくても、心理的影響を受けて、弱者を攻撃してしまう集団心理が働くことのおそろしさが主題なのだろう。

2.6.4 「川とノリオ」 両親を戦争で失ったノリオの成長物語 身近にいるかもしれない

何かがあったから成長したというのではない。

中心事件はかあちゃんが原爆で死んだこと。ノリオには爺ちゃんしかいなくなった。

1. あったかい母ちゃんのはんてんの中で、ノリオは川のにおいをかいだ。
2. すすきの銀色の旗の波と、真っ白いのぼりに送られて、ノリオの父ちゃんは、行ってしまった。
3. ひやっと冷たい三月の水。
4. (ノリオ、ノリちゃん、この悪ぼうず。今度川へなんぞ入ったら、このおしりにやいとをすえてやろ.....。)
5. 母ちゃんは日に日にやつれたが、ノリオは何も知らなかった。
6. あったかい春の日ざしを浴びて、川と一日じゅう遊んで暮らす、ノリオは小さい神様だった。
7. せみの声も川の音も閉こえない、しめっぼい防空ごうの暗やみで、ノリオは出たいと、ぐずって泣いた。
8. ノリオの家の母ちゃんは、この日の朝早く汽車に乗って、ヒロシマへ出かけていったという。
9. ときどき、じいちゃんの横顔が、へいけがにのように、ぎゅっとゆがむ。
10. ノリオは、じいちゃんの子になった。
11. 父ちゃんが戦地から帰ってきた。父ちゃんは小さな箱だった。
12. 川の底から拾ったびんのかげらを、じいっと目の上に当てていると、ノリオの世界はうす青かった。
13. まぶしい川のまん中で、母ちゃんを一日じゅう、待ってたあの日。そしてとうとう母ちゃんが、もどってこなかった夏のあの日。
14. ノリオは青いガラスのかげらを、ぽんと川の水に投げてやった。
15. 母ちゃんやざを呼ぶような、やぎっ子の声。
16. サクッ、サクッ、サクッ、母ちゃん帰れよう。

事件前 1-7 父ちゃんが出征して、母ちゃんと爺ちゃんとで暮らしているノリオ。

事件 8 母ちゃんが広島原爆で死ぬ。

事件後 9-16 母ちゃん帰れようという気持ちを持ちつつ成長するノリオ。

ノリオの成長の先である 20 歳になった時にはどうしているか？を考えるのはどうか。昭和 18 年生まれだから。昭和 38 年に 20 歳になる。2021 年現在 78 歳。

2.6.5 「O じいさんのチェロ」 O じいさんの変化？ 私の変化？

1. いつも水曜日の四時になると、いろいろなものを運んでくる救えんトラックが、広場にやってくるの。
2. ときどき、じっとしていられなくなって、アパートの入り口にあるホールを、あっち行ったり、こっち行ったりしながら、大笑いをして、走り回るの。
3. 「オー、うるさいぞ！」
4. 紙ぶくろを見つけるとふくらまして、O じいさんの部屋の前で思いっきりたたいた

てつぶすの。

5. たまに、トラックがきても、O じいさんがすがたを見せないときがあるの。そんなとき、O じいさんは、部屋で、ひとりで、チェロをひいているわ。
6. おじいさんのチェロのために、世界じゅうの人たちが力を合わせたんだよ。
7. そのとき、ズドーン！って、ロケットだんが落ちた音がしたの。トラックは、こわれちゃった。
8. みんなで広場に集まって、楽しかった水曜日。一週間に一回だけの、すてきな日は、もう来ないんだわ。
9. 次の水曜日の四時ちょうど。コンサートの衣しょうを着た O じいさんが、チェロといすを持って、外に出てきたの。
10. 「バッハだわ。」
11. それから毎日、四時になると、O じいさんがチェロを持って、広場に出てくるようになったの。
12. チェロはばらばらになっちゃってたわ。
13. かき終わると、O じいさんの部屋までそっと行って、静かに、ドアの下からその絵を差し入れたの。
14. その日の四時ちょうどに、またまた、O じいさんがいすを持ってアパートから出てきたの。みんなすごくおどろいたわ。
15. それから毎日一時間、O じいさんは、広場でハーモニカをふいてくれている。
16. そう、O じいさんのハーモニカは、わたしたちに生きる勇気をくれるのよ。

O じいさんの変化の物語か、わたしの成長物語か？

● O じいさんの変化の物語とすると。

変化前 町の住民とほぼ没交渉の音楽家

事件 配球トラック爆破

変化後 みんなのためにチェロを広場で弾く。

これは繰り返されていて、

変化前 チェロを失って住民のために弾けなくなった

事件 私が絵をプレゼント

変化後 みんなのためにハーモニカを広場で演奏する。

となっている。チェロを弾くのとハーモニカを吹くのとではどちらが物語上で重いだろう。考えどころである。

● わたしの成長物語であるとすると

事件前 O じいさんはいたずらの対象

事件 皆のためにチェロを弾く O じいさんを見て

事件後 (尊敬する)

戦争の中で勇気を持って生きる O じいさんやわたしや町の人々の姿は、日本人が書いた戦争教材には見られないものである。

O じいさんの物語であるとしたら、わたしの物語であるとしたらと違う視点で読み比べ

る学習活動ができるだろう。

3. おわりに

物語的文章の分析を単純化することで漏らす要素が出てくるが、他の物語的文章との比較ができるようになって、分析から得られる知見を増やすことができる。これは、どんな分析においても同様で、分析を単純化することを常に考えておかなくてはならない。

31 作品の分析結果を見れば、同様の構成の作品の重ね読みが容易になるので、一つの物語的文章の学習を終えた後で重ね読みに挑戦してほしいと思う。

より低学年で学習済みの物語的文章を読んで、自分の読みが深まっているという実感を共有する授業を構想したい。小学校教材を大学生が読むという授業をおこなった結果の感想である。

2021.01.21 のなみまさたか 大阪教育大学の定年退職を前にして